



HAL
open science

**”Katsura rikyû to sono teien: 1930 nen dai ni okeru Nihon
kenchiku no kindaisei no hakken” 桂離宮とその庭園: 1930 年代
における日本建築の近代性の発見**

Benoît Jacquet

► **To cite this version:**

Benoît Jacquet. ”Katsura rikyû to sono teien: 1930 nen dai ni okeru Nihon kenchiku no kindaisei no hakken” 桂離宮とその庭園: 1930 年代における日本建築の近代性の発見. *Hikaku Nihongaku kyôiku kenkyû sentâ kenkyû nenpô*, 2011, n° 7, p. 95-104. <halshs-02564409>

HAL Id: halshs-02564409

<https://shs.hal.science/halshs-02564409>

Submitted on 5 May 2020

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L’archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d’enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

桂離宮とその庭園

1930年代における日本建築の近代性の発見

ブノワ・ジャケ

現在、桂離宮に関する研究は数多くある。それだけでなく無数の桂論があり、さらには「桂論」論さえ存在している。50年このかた、桂についてのテキストがひとつも出版されない年はなかったほどだ。桂への参観は宮内庁によって厳格に管理されており、わずかな人しか参観できないにもかかわらずである。とはいえ本論は、わたし自身の桂参観に関わるものではない。わたしが桂離宮に関心を抱いたのは、日本近代建築の形成を研究する過程でのことであった。現代日本の建築言説について、なかでも「伝統」という広い概念について研究しようとするなら、桂離宮を避けて通ることはできない。桂離宮は、ときとともに日本の古典的な住居建築のシンボルとなり、日本建築が欧米に普及する——つまり「輸出」される——にあたっての窓口の役割を果たしたのである。井上章一『つくられた桂離宮神話』¹で見事に明らかにされたような、桂「神話」構築のメカニズムすべてを取り上げる余裕は、残念ながら本論にはない。けれども、ロラン・バルトが言ったような意味での「神話」の形成を把握すべく、本論ではいくぶん時代をさかのぼり、神話化の理由の一端を示すことを試みたい。

周知のように、1950年代から1960年代初頭にかけて、「伝統論争」と呼ばれるものが日本で起こった。それにもなって桂離宮は、「日本伝統建築の近代性」を示すものと見なされるにいたる。この言説を主導したのは、建築家の丹下健三（1913-2005）であった。1953年、丹下は桂離宮のプロポーシオンを近代的に解釈し、東京の成城に自宅《住居》を建設する。つづいて1960年には、アメリカ人建築家のワルター・グロピウス（1883-1969）と日系アメリカ人写真家の石元泰博

（1929-）とともに、日本語・英語バイリンガルの書物『桂——日本建築における伝統と創造』²を出版している。日本建築における国際交流、すなわち欧米の建築家と日本の建築家との交流を知るのに最適なこの書物は、桂に関する海外との共同出版物として、おそらく最初のものであった。

とはいえ、桂について、日本と西洋の双方の言説が交差する場合は、1930年代にもすでにあったと思われる。実のところ、桂離宮とその庭園は、1930年代以来、日本建築の「近代」にとっての理想形として、日本と西洋の双方の建築家たちによって記述されてきた。そうした近代主義的な桂離宮の見方に大きな影響を与えたのが、1933年から1936年にかけて日本に滞在したドイツ人建築家のブルーノ・タウト（1880-1938）である。タウトの著作の数々は、彼以後に桂を発見した世代の建築家たちにとって、必須の参照項となった。昭和初期以降の近代建築家たちによる桂離宮の「発見」は、日本人建築家たちと一人のドイツ人建築家との出会いの結果としてもたらされたものなのである。したがって以下では、おもにタウトと日本人建築家たちとの出会いを検討することにしてしよう。

しかしながらすぐさま指摘しておくべきは、いかにタウトの言説が重要であろうとも、桂離宮はすでに1920年代末に日本の近代建築家たちに知られており、評価されていたという事実である。タウトは自分こそ桂離宮の「発見者」だとしているが、実のところ、桂離宮に最初に言及した人物でもなければ、その近代性を最初に指摘した人物でもない。タウト来日以前からすでに、近代日本の建築家たちは桂離宮に関心を寄せはじめていた。それは、庭園の専門家たちが桂離宮に興味を持ち

はじめた明治時代末にまでさかのぼる。1920年代末には、桂離宮の最初の修復が終わっている。つまりタウトは、桂離宮をまったく新たに発見したというよりも、むしろ日本の建築家たちの言説に確証を与え、国際的な反響をもたらすのに貢献したのである。

当時の日本人建築家たちに日本建築の同時代的な価値を発見させたのは、岸田日出刀(1899-1966)の写真集『過去の構成』³であった。出版から40年後に催された岸田をめぐる座談会では、参加した建築家たちはこぞって、日本建築の受容における『過去の構成』の影響を認めている。参加した建築家たちには、堀口捨己(1895-1984)、佐藤武夫(1905-1970)、吉武泰水(1916-2003)、市浦健(1904-1991)、浜口隆一(1916-1995)らがいた。このとき交わされた議論を見てみよう。

堀口：「過去の構成」は非常にわれわれも感心しましたね。岸田さんはあのレンズを通して、面白いコンポジションを見る。ことに京都御所なんか、非常にうまく捉えて、ぼくは驚きましたね。まあぼくはちょうどそのころ、似たような角度で茶室なんかみる癖がついていましたが、寝殿造りのああいところの、あの目があるんだとおもって、非常に啓発されました。

丹下：わたしもまだ学生のころでしたが先生の「過去の構成」には非常に感銘をうけました。とくに大学の先生の室には先生のライカで撮られた御所の一連の写真が引伸されて、パネルに貼ってありましたが、わたしはその写真から強い影響をうけたように思います。

佐藤：「過去の構成」は岸田さんのヒットだった。日本の古典を斗拱ばかりを云々するのを解放して、われわれの眼を開いてくれた。

吉武：タウトが来たのは、昭和八年……。

市浦：そんなころですね。

浜口：タウトがそういうようなことをいう、かなり前なのですね。

市浦：あれは、堀口先生が一番われわれを啓蒙して下さって、それが建築界全体の目を開いたんじゃないかとわたしは思うのですけれども。岸田先生や堀口さんは同じグループで、ずっと主張しておられたのです。それでタウトが来た時、タウトにそういうふうな見方を、ある程度指導したのはやはり本当に日本人だと思うのです。しかしタウトが来てから、彼の書いたものを通じて伊勢神宮とか、桂の価値が、一般の人に知られて、日光は駄目だということなどもタウトがいったので、他の人もそうかと思うようなになった。あれは一寸憤慨したのです。⁴

ブルーノ・タウトが日本建築に関するその印象を広めるにあたって、日本のマスコミを有効に活用したとはいえ、「憤慨」という言葉は少々強すぎるように思われる。タウトの著作がすぐさま英訳されたことは、国内的にも国際的にも多くの人々に読まれるきっかけとなった。1936年には『Fundamentals of Japanese Architecture』(日本建築の基礎)⁵が日本文化振興会によって出版され、1937年には『Houses and People of Japan』(日本の家居と生活)⁶が三省堂から出版される。タウトは序文で、「ドイツ語原稿を英語に翻訳する手配という難しい問題を含め、出版社である東京の三省堂が本書のために示してくれた理解ある配慮と忍耐への感謝」を表明している。

英語版だけでなく日本語版も出版されている。1934年に『ニッポン』⁷が、また1942年から1944年にかけて日本語版『タウト全集』⁸が刊行されている。この出版作業は、哲学者の篠田英雄(1897-1989)によって1938年からはじめられ、言語学者の新村出(1876-1967)、建築家の伊東忠

太 (1867-1954)、歴史家の西田直二郎 (1886-1964) が監修を務めた。ついで 1949 年、建築家の吉田鉄郎 (1894-1956) とともに、篠田は『Houses and People of Japan』を翻訳する。さらにそののち 10 年近く『タウトの日記』⁹の翻訳に取り組んでいる。タウト研究にその活動の大部分を費やした篠田英雄がけっして孤立していたわけではないことは、注目に値する。いずれにせよ、日本でタウトの著作が現実に成功をおさめ、日本文化についての言説の展開に寄与したことは、確実である。

1929 年に構成社から出版された岸田日出刀の『過去の構成』に話を戻そう。この本は A4 サイズの 63 頁分の図版からなり、それぞれの図版は短いコメント付きの写真によって構成されている。岸田日出刀は「自序」で、日本建築について『過去の構成』と『現在の構成』の 2 冊の本を出版するつもりであったことを述べている。

本書は決して過去の日本の建築の歴史的研究書では毛頭ない。正しい参考書ともなり得ないであろう。近いうちに公にしたいと思つてある「現在の構成」の姉妹篇の意味のもので、過去の日本建築、より適切には過去の日本造形藝術の全般に涉り、現代人の構成意識とも言ふべき観点から眺めやうとしたものである。

岸田はこのテキストの最後に 1929 年 8 月 19 日「グラーフ・ツェッペリン号飛來の日」と書いている (図 1)。欧米の列強諸国と同様に、日本が近代的な暮らしへと移行しつつある時代にあつて、岸田は、彼の時代における「モダン」の観点から過去の建築を紹介しようと意図していた。

『過去の構成』には、ル・コルビュジエが 1920 年代に出版した建築書からの影響、とりわけ『Vers une architecture』(建築藝術へ)からの影響がある。このことは否定しようがない。ル・コルビュジエの書物は 1923 年に出版され、1928 年に再版、1929



図 1 Graf Zeppelin LZ127 1929 年 8 月 19 日「グラーフ・ツェッペリン号飛來の日」

年に日本語訳が構成社から刊行されている¹⁰。この書物のなかでル・コルビュジエは、アテネやローマの古代建築の写真と、近代的な機械の写真(スポーツカーや飛行機、客船、工場)を並べている。

同じく岸田もまた、シュルレアリスムのコラージュほどではないにしても、革命的である。たとえば岸田は、1929 年当時もっとも近代的な機械であつた「グラーフ・ツェッペリン号」を、古代建築のかたわらに置く。そうして、グラーフ・ツェッペリン号との差異によって、古代建築の古代性が明らかにされている。けれども同時に、古代建築の同時代性もまた明らかになっている。というのも、近代機械と古代建築はいずれも、まさしく現代に同時に存在しているからだ。

岸田が選んだ 75 枚の過去の建築の写真のうち、4 枚が桂離宮に関するものである (ほかには奈良の仏教寺院に関するものももっとも多く、なかでも法隆寺が 17 回、東大寺は 9 回、薬師寺は 5 回登場する)。岸田は、桂離宮の書院の内側と外側の写真 2 枚ずつにコメントしている。

まず 52 頁の図版では「桂離宮の玄関」が取り上げられている。桂離宮の玄関が近年修復されたことについて、岸田はこう語る。

このやうな名建築が離宮として完全に永久に保存されるといふことはこの上ない喜びである。

つづいて岸田は、彼の見るところ桂離宮の特徴たるものを示していく。まず庭へとつながる書院。

古書院、中書院、新書院一團となつて構成されたこの建築は、見る度毎に新たな感激と啓示を與へてくれる。

岸田はこの空間感覚を、つづく図版でも取り上げている。53頁の図版は「桂棚」と題されている。そのすべてが記述されているわけではないものの、はじめに次のように呈示される。

この棚は、修學院離宮の雲棚、醍醐三寶院の醍醐棚と共に、世に日本の三棚として喧傳され、俗に桂棚と呼ばれてゐることは人のよく知るところである。

そして美学的な考察を加える。

その秩序よく統一された變化は形の構成に於いて果してこれ以上のものが他に期待できやうかと思はれる程見事である。

ついで詩的な考察。

木と紙と畳、みんな生きてゐる。死んでゐるところは一つもない。

最後に、ル・コルビュジェ風に、この建築空間の美学的・技術的完全性を当時のもっともハイテクな機械の完全性と結びつける。

自分はこの棚を見るとき、グラーフ・ツェッペリン號に接した時と同じやうな潑刺とした

モダーニズムを経験する。

54頁の図版は端的に「桂離宮」と題されているが、書院を斜線上に並べた「雁行配置」という仕掛けの写真が掲載されている。

古書院月見臺、中書院、新書院と次々に小さく見える。

庭に面した部屋をこのように配置することは、日本建築空間の近代性の主たるものとして、しだいに有名になっていく。この配置は、庭に対する複数の視点、良い日当たり、書院の正面に沿った流れ、といったものを作り出している。この岸田の写真が近代建築家たちに取り入れられていったことは、のちほど確認しよう。

ブルーノ・タウトは、来日した折に、この岸田日出刀に会っている¹¹。タウトが東京駅に到着したのは1933年6月18日。そのとき10人の日本人建築家が待っていたという。おもにドイツ近代建築の影響を受けた表現派やバウハウス派の建築家たちであり、石元喜久治（1894-1963）や山脇巖（1898-1987）らである¹²。おそらくはさらに吉田鉄郎（1894-1956）、山田守（1894-1966）、谷口吉郎（1904-1979）、堀口捨己らもいたと思われる。岸田もまた、当時の多くの建築家たち（なかでも伊東忠太や吉田鉄郎）と同様に、ドイツの流れを汲む建築家であり、博士論文ではオットー・ヴァーグナー（1841-1918）を取り上げている。岸田はヨーロッパに行く機会も多く、たとえばベルリン・オリンピック（1936年8月1日～16日）の際に、1936年7月から10月までの3ヶ月間をベルリンで過ごし、建築とドイツ政府の都市計画を研究している¹³。

実のところ、タウトの著作で使われている桂の写真のほとんどは岸田が撮影したものだ。なかでも『Houses and People of Japan』（日本の家居と生

活)の最終章「The Permanent」の写真がそうである。篠田英雄によって「永遠なるもの」と訳されているこの章は、タウトが桂参観について書いたものだ。ことによると、タウトには桂離宮の写真撮影が許可されていなかったのかもしれない。タウト自身が撮った写真は唯一、桂離宮入口の竹垣のみである(図3)。

タウトが日本で最初に出版したのは『ニッポン』だが、この書物は1933年6月24日に書きはじめられ¹⁴、7月13日に原稿が編集者——東京の明治書房の高村氏——に送られている¹⁵。「桂」の章が執筆されたのはその前日、7月12日であった¹⁶。この原稿はすぐさま日本語に訳され、1934年5月に出版された。

ここでタウトの桂参観の経緯をあとづけておこう。タウトが桂を訪問したのは、まさに日本到着の翌日、1933年5月4日である。タウトが敦賀港に到着したのは5月3日。このとき天草丸のデッキ

キまでタウト夫妻を出迎えにいったのが、有名な記念写真(図4)に写っている建築家の上野伊三郎(1892-1972)、中西六郎(1900-1964)、中尾保(1894-1963)である。三人とも日本インターナショナル建築会のメンバーである。このうち上野伊三郎は、日本インターナショナル建築会会長であり、タウト招聘の責任者であった。

ひとつエピソードを紹介しておけば、タウトは日本での最初の夜を、京都の下村邸で過ごしたという。京都でタウトの世話をした下村正太郎(1883-1944)は、大丸百貨店の社長である。下村は、アメリカのキリスト教宣教師ウィリアム・ヴォーリズ(1880-1964)に、チューダー様式の邸宅を設計させている。現在では「大丸ヴィラ」と呼ばれているこの邸宅は、御所の西南方面、烏丸丸太町に面した一角にある(タウトは京都に来たときはつねにこの邸宅に滞在したという)。この日タウトは下村邸でヴォーリズにも会っている¹⁷。

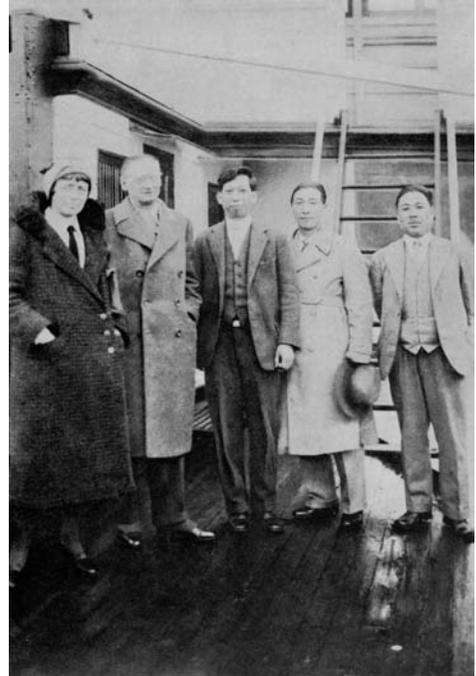
CHAPTER XII
THE PERMANENT*

The visit to Katsura had been well prepared. Our kind host in Kyoto had informed the authorities of our particular appreciation of Japanese culture, thus inducing them to permit an easy access and saving us the inconvenience of having to trot as usual behind the official guides. This enabled us to contemplate everything at leisure. He had also obtained the permission for us to be accompanied by Mr. Ueno a Japanese architect from whom not only I had obtained especially valuable enlightenment as to the spirit of ancient things, but with whom also I was on the friendliest personal terms. The pains Mr. Shimomura took to obtain the entrance permission for Mr. Ueno put me all the more under an obligation to him as, strangely enough, access to the ancient splendours of their own culture is made more difficult for the Japanese themselves than for foreigners.



Fig. 305

図3 タウト『Houses and People of Japan』最終章「The Permanent」に掲載のタウト自身による桂離宮入口の竹垣の写真



左より タウト(エリカ)夫人、タウト、上野、中西、中尾の諸氏
1933年5月3日敦賀港(天草丸船上)にて

図4 タウト来日時の記念写真

翌日、タウト最初の桂参観の折には、この下村と上野、そしてガルニエ夫人が同伴している。ガルニエ夫人の夫は、現在の京都大学（旧制第三高等学校）のフランス語講師であった¹⁸。この日の参観の様子は、タウトの日記『日本旅行記』（Reisenotizen Japan）に記されている。8巻からなるこの日記（25×18 cm および 19×16 cm のノートで総計 858 頁）は、篠田英雄の手によって3巻の日本語版に編集され、1950年から順次出版された¹⁹。なお、この日記の完全版は、もとのドイツ語ですら出版されていない。

ともあれ、タウトが本格的に桂離宮の分析をはじめたのはその1年後、1934年5月7日の2回目の参観のときからである。タウトが言うには「大方の外人は、この桂離宮全体の拝観を五十分そこそこで片付けてしまう」が、それに対してタウトは4時間も桂離宮にいたという²⁰。このときタウトはスケッチもおこなっている。一連のスケッチには「Gedanken nach dem Besuch in Katsura」という題（日本語には「回想——桂離宮を拝観して」と訳されている）がつけられ、これも篠田英雄によって『画帖桂離宮』²¹として出版された。

これらのスケッチに眼を向けるなら、タウトがそこに詩的ないし哲学的なテキストを添えていることに、すぐさま気づくだろう。たとえば、最初のページにはこう書かれている。

桂離宮

御殿と御庭！

ここでは 眼が 思惟する

自由な精神

スケッチは参観の順路に沿って並べられており、そこに添えられたテキストにはタウトのよろこびと熱狂があらわれでている。たとえばタウトは「Die Welt ist schöne」（世界は美しい）と書いている。このようなフレーズは、理知的な論証というよりもアフォリズムに近いものだろう。

それでも、いくつかのアイディアは『Houses and People of Japan』（日本の家居と生活）にも取り込まれた。たとえばタウトが新御殿（新書院）前の芝生について書いた一節。

ここでは

造園術は

樹木と

芝生

伊勢——日本

また

それ故に

国際的

である 住居し——為事する ところでは
「芸術」はなく モチーフはない

『Houses and People of Japan』（日本の家居と生活）には、この一節の解釈が見いだされる。最終章「The Permanent」（永遠なるもの）で、池の周囲の庭をめぐったあとで見られる——これこそ池泉回遊式庭園の目的だが——新御殿の庭について、タウトはこう書いている。

私達はここから御殿に向かった。向かって左方の、うしろにのびた翼は平生のご住居として用いられたものである。ところがここには日本風の造園はもうまったく見られない。この庭園は周囲に樹木を植えこんだ広闊な芝生である。樹木は弓形の線に沿って植えてあるが家屋に近いところでは広い芝生を残している。これは世界のどこにも見かける自然で単純なやり方である。造園術は、松琴亭にいたる道では哲学的風格を示し、次に優雅な林泉を展開し、最後に日常の生活が営まれる居間から外の眺められるところではまったく用いられていないのである。



Fig. 515

On returning to the palace from here, we made our way towards the residential wing. But no Japanese garden-art was seen here any more. There was a large plot of grass planted with trees, which had first been designed as an archery court, and then an open space extending up to the house. It was of the same naturalness as all over the world. The garden-art on the way to the tea-house began in a philosophic frame of mind, further on it changed to a graceful park and here, where everyday life took its course, where from the window the eye roamed over the open, art ceased altogether.

I mean, of course, that the special motives of Japanese garden-art were lacking. The stone path lining the azalea-hedge, the stones embedded in moss and placed in a straight line, and also the stone border near the house, were really of modern delicacy. One could only wish that Japanese architects might imitate this exactly, instead of trying to copy intensely delicate and inimitable things. There was a border of straight stone slabs separating the moss from the grass. Then came a layer of round pebbles, which caught the water dripping from the caves, and from there a gravel-path leading up to the house.



Fig. 516

Where lay the mystery of the garden? Its shape had been produced quite naturally by the purposes to be fulfilled. In the regions used for the needs of daily life the only traces of refinement were plainly utilitarian. The particular atmosphere of the garden, rooted in Zen philosophy, created new forms on the path to the tea-house where the mind was concentrated on harmony. But to the first view, from that point at the entrance gate where one could glance across the garden, and also from that idyllic bridge next to the cascade, the garden revealed nothing that in its philosophical elements was unsuitable to the outer world.

図5 タウト『Houses and People of Japan』より、桂離宮の三つの書院の写真

これは日本庭園に独自のモチーフの脱落を意味する。躑躅の生籬に沿った飛び石道、青芝の上一直線に敷かれた石、それから家屋の輪郭に並行に画された縁石は実に現代的な雅致を示している。²²

いったい桂離宮の林泉の秘密はどこにあるのだろうか。この御庭の形式は、それぞれ相異なる三様の目的から生じたものにほかならない。日常生活が他寄なく営まれるところでは、庭もいわば実用的なもの、有用的なもの、有用なものとして最高の洗練を示している。²³

さらに桂参観の最後で、タウトは結論として桂離宮の近代性について書きしるしている。

《このような建築を現代の概念で表現するとしたらなんと云えるのでしょうか》、私は同行の

友に訊ねた。そして結局これは機能的建築であり、或いは合目的建築ともいい得る、ということに一致した。全体の結構はどの方向から見ても、そのあらゆる部分を上げて融通無碍に部分並に全体の実現すべき目的に適っている。

私はつとに現代建築の発展はそのまま最も重要な基礎を機能に求めなければならないと主張してきた。[略] 私は桂離宮のこの旧い建築において、私が現代建築の重要な基礎として確立した理論が間然するところなく実証されていることを知った。²⁴

一読して明白なように、タウトは近代建築家の眼で、当時の需要にあった建築ヴィジョンというフィルターを通して、桂を分析している。この書物の最後に掲げられている写真(図5)は、雁行配置の三つの書院を写したものである。この写真

は、桂離宮の建築空間の魅力を集約している。これについては、すでに見たように、岸田日出刀も1929年の時点で言及していた。しかしながら1930年代末にもなると、日本人建築家たちは岸田よりもタウトの言説を通して、桂離宮と伊勢神宮への賛嘆を表明するようになっていった。

『過去の構成』の1938年の新版に、岸田は新たに、桂離宮に関する2つの図版とコメントを追加している。そのうち58頁の図版には、唯一タウトへの言及が見いだされる。「桂棚と庭」と題されたこの図版へのコメントは、すでに1929年に書いていたことをほとんどそのままちいているが、岸田はそこにタウトへの言及を付け加えている。タウトもまた、桂離宮が世界的に見ても第一級の建築作品だと考えていたというのである。

造形上の意匠に少し深い感覚をもつ西洋人なら、かうした棚のよいこと直ぐ判る筈、ブルーノ・タウトが日本の建築を親しく見て、伊勢神宮と桂離宮の建築こそ、日本が世界に誇りうるもの、世界建築界の聖地がここにあると悟得したのも宜なる哉である。

たしかにタウトは、桂はまちがいなく「古典的建築」であると『ニッポン』に書きしるしている。そして桂離宮をアテネのパルテノン神殿と比較している。来日する数週間前に、タウトはパルテノン神殿を訪れていた²⁵。これについては、パルテノン神殿に賛嘆していたル・コルビュジェの言説を引き合いに出すこともできるかもしれない。しかしながら、自分自身の文化（この場合はパルテノン神殿）を参照しながら、外国の古典建築（ここでは桂離宮）を見ることは、旅行者一般に共通する傾向だろう。20世紀前半にあつては、西洋から東洋への旅行者たちは、東洋学者でさえも、言うなれば西洋の遺跡と同じ基準でアジアの遺跡を評価していたのである。

ブルーノ・タウトが桂と交わした対話について

結論をひきだすにあたり、1941年に岸田日出刀がタウトの『ニッポン』に寄せた「序」の言葉を取り上げよう。実のところ、岸田がタウトについてもっとも語っているのは、このテキストをおいてほかにない。岸田はタウトを理想的な知的建築家として紹介しているが、とりわけ注目に値するのはこの一節である。

タウト氏は單に建築の専門的技術だけに終始する人では決してない。[略]例へば現代建築を論ずるに當つても、新時代的技術だけに就て述べるといふに止まらないで、深く現代といふ時代の特質をその根幹に於て捉へ、現代文化の本質を究めて闡明して、しかる後に現代建築の普遍的必然性を強調し論述するといふ態度が正しくはつきりと現れてゐる。

本論で触れることができたのは、タウトが日本について書いたテキストのごく一端にすぎない。

とはいえ、『日本の家居と生活』を紐解くだけでも、タウトの仕事の人類学的な価値を理解できるだろう。タウトは日常的な基本的機能にもとづいて建築を理解し、それによって建築表現の普遍的な特質を把握できた。ちょうどクロード・レヴィ=ストロースが普遍的構造にもとづいて神話を研究し、比較をおこなったのと同じようにしてだ。タウトと岸田もまた、桂離宮の建築的構造を分析しながら、無意識のうちにレヴィ=ストロースと同様の仕事を成し遂げている。彼らは古い建築を再解釈する道を開いた。そうして、建築の普遍的で永続的な特質を理解できるようにしたのである。

註

本論の日本語訳にあたっては、フランス国立極東学院京都支部（EFEO Kyoto）リサーチ・アシスタントの岡本源太、橋本周子、山本友紀の各氏の助力を得た。記して感謝したい。

¹ 井上章一『つくられた桂離宮神話』講談社学術文庫、1997年（初版1987年）。

² ワルター・グロピウス、丹下健三、石元泰博『桂——日本建築における伝統と創造』*Katsura: Tradition and Creation in Japanese Architecture*, 造型社-Yale University Press, 1960年。

³ 岸田日出刀『過去の構成』構成社書房、1929年、1938年、1951年。

⁴ 「先生を思う」1969年6月2日、岸田日出刀『岸田日出刀』相模書房、上・下、1972年、上206頁。

⁵ Bruno Taut, *Fundamentals of Japanese Architecture*, Kokusai bunka shinkōkai 国際文化振興会, 1936年。ブルーノ・タウト「日本建築の基礎」『日本美の再発見——建築學的考察』篠田英雄訳、岩波書店、1939年、岩波新書、赤39、増補改訳版『日本美の再発見』1962年。

⁶ Bruno Taut, *Houses and People of Japan*, Tokyo, The Sanseidō Co. 三省堂, 1937。ブルーノ・タウト『日本の家屋と生活』篠田英雄訳、雄鶏社、1949年、春秋社、1950年、2008年。

⁷ Bruno Taut, *Nippon: mit europäischen Augen gesehen*, 1933。ブルーノ・タウト『ニッポン』平居均訳、明治書房、1934年。『ニッポン——ヨーロッパ人の眼で見た』森俊郎訳、明治書房、1941年、1947年。『ニッポン』講談社学術文庫1005、1991年。

⁸ ブルーノ・タウト『タウト全集』篠田英雄編、育生社弘道閣、1942-1944年。

⁹ ブルーノ・タウト『日本——タウトの日記』篠田英雄訳、第一冊1933年、第二冊1934年、第三冊1935-1936年、岩波書店、1950年、1975年。

¹⁰ ル・コルビュジエ『建築藝術へ』宮崎謙三訳、構成社書房、1929年。

¹¹ 岸田日出刀「序」、『ニッポン』前出、明治書房、1941年。

¹² ブルーノ・タウト『日本——タウトの日記』前出、1975年、第一冊1933年、「五月二十八日（日）東京——東京の諸建築家」101-104頁。

¹³ 岸田日出刀「ナチス独逸建築一色化とは」『建築雑誌』昭和12年3月。

¹⁴ ブルーノ・タウト『日本——タウトの日記』前出、第一冊1933年、「六月二十四日（土）京都」150頁、「六月二十九日（木）比叡山・上野氏別荘」153-154頁。

¹⁵ 同書、第一冊1933年、「七月十三日（木）京都」155頁。

¹⁶ ブルーノ・タウト『画帖桂離宮の解説』篠田英雄訳、岩波書店、2004年、92頁。

¹⁷ ブルーノ・タウト『日本——タウトの日記』前出、第一冊1933年、「五月三日（水）天草丸——敦賀——京都」36-38頁。

¹⁸ 同書、第一冊1933年、「五月四日（木）京都——桂離宮」38-43頁。

¹⁹ 篠田英雄「ブルーノ・タウトのこと」『日本——タウトの日記』前出、第一冊1933年、1-31頁。

²⁰ ブルーノ・タウト『日本——タウトの日記』前出、第二冊1934年、「五月七日（月）京都——桂離宮」265頁。

²¹ ブルーノ・タウト『画帖桂離宮』篠田英雄訳、岩波書店、1981年、2004年。

²² ブルーノ・タウト『日本の家居と生活』篠田英雄訳、春秋社、2008年、339頁。

²³ 同書、340頁。

²⁴ 同書、345頁。

²⁵ ブルーノ・タウト『ニッポン』前出、33頁。